

存在することは話すことや書くことの形をとって問題の中に突入する

《文学という、(私たちの知る範囲だけでも)約二千五百年にわたって行なわれてきたこの壮大な事業それじたいが、私自身はそう思うのだが、もし叡智を具現しているのだとしたら、それこそ、文学の重要性の根拠である。そのために文学じたいは、私たちの個人としての運命と共同体としての運命の、複数の本質を指し示さなければならない。私たちがもっとも大切にしているもろもろの価値には、矛盾も、ときには緩和しえない対立もありうる(「悲劇」とは、まさにこのことを指す)、ということ想起させること。文学は「これもまた」とか「他にも」といった別の存在に気づかせる仕事だ。実際、つねに、また別のことが起こっているからだ。

文学の叡智は、意見をもつこととは正反対の位置にある。「何に関しても、最終的な言葉など、私にはない」とヘンリー・ジェイムズは言っている。要請されれば必ず意見を披瀝する。そんなことを続けていると、たとえその意見が正しくとも、小説家や詩人がもっとも得意とすること、すなわち省察力の深化と複合性の探究を軽薄なものにしてしまう。

情報はけっして啓発を凌駕しない。だが、情報にまさりはするが情報に似て非なるもの、つまり、情報をもっている状態、つまり、具体的な、特定の、詳細な、歴史的に濃密な、直接体験によって得た知識は、作家が公に意見を述べるからには不可欠な前提だ。

他の人々、有名人や政治家が偉そうに話しているのは、話させておけばよい。嘘八百だ。彼らにかわって、もし作家が、同時に公の声として語った場合、何かましなことがあるだろうか。それは、意見や判断を組み立てることが、みずからの至難の責務であることを、作家たちならば肝に銘じている点だろう。

意見にまつわるもう一つの問題。意見には自己固定化の作用がある点だ。作家がすべきことは、人を自由に放つこと、揺さぶることだ。共感と新しい関心事へと向かって道を開くことだ。もしかしたら、そう、もしかしたらでかまわない、いまとは違うもの、より良いものになれるかもしれないと、希望をもたせること。人は変われる、と気づかせることだ。

ニューマン枢機卿がいみじくも語っている。「高いところの世界ではそうではないが、この下界では、生きることは変化することであり、ここで言う完璧とは、相次ぐ変化の経過である」。

私は「完璧」という言葉にどんな意味を託しているか。説明抜きで言うだけにするが、完璧は私の笑いを誘う。つけ加えれば、シニカルな笑いではない、喜びの笑いである。

エルサレム賞を受け、感謝している。文学という事業に献身するすべての人々への荣誉として、これを受ける。イスラエルとパレスチナで、個としての声と、複数の真実からなる文学を創造すべく格闘している、すべての作家と読者への敬意とともに、これを受ける。平和の名において、また、傷つき、恐怖に満ちた共同体の和解の名において、この賞を受ける。必然としての平和。必然としての譲歩と新たな調整。類型の必然としての減衰。対話の必然としての持続。国際ブックフェアの後援によるこの国際的な賞を、何よりも国際的な文芸の共和国に敬意を表する契機として受ける。》

後年、同様にこの賞を受けた村上春樹のスピーチの倍の量にも上るソントグのスピーチは、村上とは異なって、イスラエルの賞でありながら、意識的にパレスチナを視野に収めようとしており、それはスピーチの最後に、「イスラエルとパレスチナで、個としての声と、複数の真実からなる文学を創造すべく格闘している、すべての作家と読者への敬意とともに、これを受ける」と表明していることにも見出される。パレスチナをも視野に入れることによって、イスラエル創設のエルサレム賞は、イスラエルとパレスチナの共同の創設による文学賞にまで拡大されることがふさわしく、そのような賞として自分は「これを受ける」と語っており、「平和の名において、また、傷つき、恐怖に満ちた共同体の和解の名において、この賞を受ける。必然としての平和。必然としての譲歩と新たな調整。類型の必然としての減衰。対話の必然としての持続」とは、そのような方向にエルサレム賞が位置づけられてこそ、文学賞の本来の役割に相当するのではないかと問うているのだ。

この賞についてソントグはスピーチの中で、「比較的歴史は浅いが、この賞は20世紀後半の最良の作家の何人かに授けられてきた。どんな明白な基準からしても、文学賞の名にふさわしいこの賞は、しかし、『エルサレム文学賞』ではなく、『社会における個人の自由のためのエルサレム賞』と呼ばれ

ている」が、「この賞を受けたすべての作家が、社会における個人の自由を擁護してきた」かどうかではなく、「その作家が何を語るかではなく、その作家が何者なのか」が肝心だ、と言う。では「作家が何者なのか」とはなにか。別の個所でソントグは作家について、こう説明する。

「作家の第一の責務は、意見をもつことではなく、真実を語ること……、そして嘘や誤った情報の共犯者になるのを拒絶することだ。文学は、単純化された声に対抗する、ニュアンスと矛盾の住み処である。作家の職務は、精神を荒廃させる人やものごとを人々が容易に信じてしまう、その傾向を阻止すること、盲信を起こさせないことだ。作家の職務は、多くの異なる主張、地域、経験が詰め込まれた世界を、ありのままに見る目を育てることだ。

さまざまな現実を描写すること、それも作家の仕事だ。汚れた現実、歓喜の現実。文学（文学の功績という多元的なもの）が供する叡智の精髓は、何が起きていようと、つねに、それ以外にも起きていることがある、という認識を助けることだ。」

「この『他にも何か』ということが、私の頭を離れない」と続けて言うとき、もちろん文学は、「何が起きていようと、つねに、それ以外にも起きていることがある」というところへと誘いこんでいく力であり、その文学の力に掴まれているということであるかもしれない。おそらく「真実」とは何かが起きているところよりも、「それ以外にも起きていることがある」というところに潜在しているだろう。ただここで註記しておきたいのは、いま何かが起きていることと、「それ以外にも起きていること」との関係が把握されていなければ、いま何かが起きていることを回避して、「それ以外にも起きていること」へと移動していくことになるだけだということである。そうならないためには、いま何かが起きていることに向かっていくことが、「それ以外にも起きていること」へと歩を進めつつあることであるようなスタンスをつくりださなければならない。

また、「それ以外にも起きていることがある」ということへのまなざしが文学にたえず問いかけ、その逸脱を作家に求めているなら、ソントグが次のように語っていることにつながっていくだろうか。「言うまでもなく、義憤にかられた行動というものを私は信じている。だが、行動する人、それは作家だろうか。

三種の異なる事柄がある。いま私が行なっている話すこと。そして書くこと、(…)そして存在すること、それによって私は、他者との能動的な連帯を信じる人間としてある。

かつてロラン・バルトが看取したように、『……話す人は書く人ではなく、書く人は存在する人ではない』。」

では、話す人は存在する人であるのか。「三種の異なる事柄がある」というソントグの規定によれば、話すことは存在することではない。私の考えでは、話すことも書くことも存在することにつながっている。たとえば、池上コラムは「検証の不十分さ」と「謝罪」と書くことによって、朝日問題の中に存在することになったといえる。逆に高橋論壇時評は何を書いても、たらたら書いているだけで朝日問題の中に存在することができなかった。話すことも同様である。どのような場所で、どのような時に、どのようなことを話すかによって、話すことも問題の中に存在することになってしまう。また、単に居ることは存在することではない。したがって、「三種の異なる事柄がある」というソントグの規定を越えて、存在することは話すことや書くことや存在することのかたちをとって、問題の中に突入していくことが起こりうると考えられる。

「一般市民への均衡を欠いた火力兵器攻撃、彼らの家の解体、彼らの果樹園や農地の破壊、彼らの生活手段と雇用、就学、医療、近隣市街・居住区との自由な往来の権利の剥奪である……。こうしたことが、敵対的な軍事行動に対する罰として行なわれている」と、「パレスチナ問題」を明らかに念頭に置いて話したとしても、彼女はその問題の中に存在しているわけではない。しかし、そう話すことによって彼女は自分のスタンスを明らかにしている。

更に、「自治区でのイスラエル人の居住地区建設が停止され、次いで——なるべく早期に——すでに作られた居住区の撤去と、それらを防衛すべく集中配備されている軍隊の撤退が行なわれるまで、この地には平和は実現しない」と話すことによって、彼女は自分の考えも明らかにする。もちろん、それだけのことで、彼女は具体的な問題の中に存在しているわけではない。しかし、いまのイスラエルによるパレスチナ対策には反対であると当地ではっきりと言い切ることによって、彼女は批判した自分を世界にむかってだけでなく、自分の存在にむかって開示していくことになったのである。もはや後戻りはなく、自分の存在に向かっていくことが自分に待たれていることをあらわしていたのだ。

